

「虚空津姫」と「狗古智卑狗」と

—魏志倭人伝の理解に—

富 来 隆

ここに「虚空津姫」というのは、宇佐八幡宮の末社たる古表宮（上毛郡）・古要宮（中津市）における女神（豊姫という）のまたの名である。「狗古智卑狗」とは、いわゆる魏志倭人伝のうちに「邪馬台」女王国の南にありとされる「狗奴」男王国において「其の官に、狗古智卑狗あり、女王に属せず」と見えるものを言う。この両者の意味、また関連ありや否やを考えてみようと思うのである。

私はさきに「邪馬台国」が豊前平野の宇佐・中津付近となる（倭人伝の読解からそうなるはずだ）と考え、そして「狗奴国」をおそらく伊予・河野郷に比定されると考えた。この地はともに日本古代史における海人族の根拠地であった。一は大綿津見の神をいただき、一は大山積の神（和多志の神ともいう）をいただきつゝ互いに海上雄飛を競つた勢力であった。魏志倭人伝には「邪馬台国」と「狗奴国」とは「素より和せず、相攻撃」する状態であつたと記される。正始八年（西暦二四七年）のことである。当時（三世紀半ば）は弥生式文化の後期と考えられる。北九州から瀬戸内海沿岸には銅銚文化圏がこれをおおひ、そして九州北半は銅戈圏であり、中央瀬戸内は平型銅剣の圏内にあつた。これが東瀬戸内から近畿におよぶ銅鐸文化圏と対照の妙を示している。広い同一文化圏でありつつ、狭い文化圏では対立していること、これと魏志倭人伝の文章と対比してみるとよく符合して面白い。

ところで、私は本誌の前二回にわたつて「大野川」と題して中世の大神オウガと緒方氏のことについて小考をのべた。水軍衆としての緒方氏とむすびついて、たまたま海人族の文化の一面としての「海神」の神社の祭祀について諸書を読みしらべるうち、船と木霊くもつと（久々遅命）とから、さらに木偶こくわ愧儡子くぐつ（くぐつ）におよび、古表・古要の二宮における「虚空津姫」に関心が強くなり、そのことからさらに魏志倭人伝に見える「狗古智卑狗」の名に思いをはせるに至つた。

神事ことにその芸能について甚だ詳ならざる私であり、あるいは当を得ぬことの多いのをおそれるが、またそれゆえに却つて大方の御叱正と御高教とを希いながら、一応私なりの思いを書き綴つてみたい。

八幡大神やわたや住吉大神が、海神としての性格を強く示していることは、神話・古伝承のうちに、またその祭祀（ことに大袂の神事）の様子にうかがわれる。そして八幡神と住吉神とはまた神功皇后の故事によつて強く関係している。北九州から瀬戸内海の沿岸の一带にわたつての二神の濃厚な鎮座のうちに、海洋文化史の一側面をさぐることも可能なようである。いま順序だてて論理的に述べるには力も及ばず、なお想も熟せぬが、八幡神にかかわる「虚空津姫」のことから少しづつ記述をすすめてみたい。

豊前国の中央（いま福岡・大分の県境）を北流して西セト内海にそそぐ山国川。これをもと御木川（ミケ）といつた。三毛川とも記されている。その西岸が上毛郡（カミツミケ）であり、東岸が下毛郡（シモツミケ）である。ミケとは御食あるいは御膳（ミケ）の謂であらうとは中野幡能教授の指摘されるごとくであつて、供御・御贄（ニエ）に関する名称かと思われる。その川の河口近くに、上毛郡吉富町に「古表宮」あり、下毛郡中津市のうちに「古要宮」がある。ともに「コヨウ宮」とよばれるが、また一名を「おばさま宮」とも言われている。神功皇后を主神として、姫大神はここでも皇后の妹君（その名を豊姫という）であり、俗には皇后の従神（その名を「虚空津姫」とす）とされている。この二社ともに古くは大貞社こま（薦八幡とも

いい、八幡神の発現の地と伝う)に属したかとも思われるが、二社ともに傀儡子(くぐつ)の神事をもつてつとに世に知られている。別に宇佐八幡宮の傍らに「百太夫殿社」(いま百体社と称す)が存するが、このほうには現在はそのような神事を伝えていない。

中津市の古要宮にあつては、その起源を神功皇后の三韓征伐のみぎりの故事に由来すると伝えており、吉富町の古表宮においては、養老三年八幡大神が朝廷の祈願に応じて神軍をひきい、日向・大隅の隼人を征討のとき、戦場において伎楽を奏したことに始まると伝えてある。宇佐町の百太夫社もまた古表宮と同様の伝えをもつ(これは神官六人みな楽人なりとす)。この二社の傀儡子の神事はいずれも旧暦八月、宇佐宮の放生会に際して行われたものと言われている。「宇佐宮放生会記」および「豊前志」所引の伝記によれば、八月十三日に神輿および傀儡子を船にのせ奉り、和間ノ浜の海上に至つて、宇佐宮神輿の頓宮より海上の浮殿に行幸あるとき、細男伎楽を奏するのである。

「細男」は、豊前志に渡辺重春これを「ほそお」と読み、あるいは「くわしお」と伝えられるが、これは後世のあてよみであつて、本来は「サイノオ」と呼ばれるものであつた。奈良の春日若宮の祭礼には「細男」(セイノオ)と称するもの六人、烏帽子・素袍にて舞をするといわれ、「祚原八幡宮誌」には「声納衆」の記載が散見し、また宇佐宮の末社百太夫社の神官六人がみな楽人であることなど参照せられるべきであろう。また中古、宮中で御神楽の奏せられるとき、「江家次第」・「西宮記」などには人長(ヒトナガ)の舞ののち酒一巡して、才の男の態があると次第書きしている。

ところで古表・古要の二宮における神事は、まず御神楽が行われ、それに続いて細男ノ舞があり、次に御相撲がなされるのである。細男ノ舞に出る傀儡子は二十七体、神相撲のそれは東・西十二体づつ(計二十四体)だと半田康夫教授は古要宮の神事について説かれ、古表社のそれは舞において十番二十体、相撲において東・西十一体づつ(計二十二体)のことが平井武夫氏によつて報告されている。古要宮には諸神の名が無く、御太刀持・鉾持・御幣持などの神々に、磯良神(竜神と伝えられる)および細男役(白覆面の男一休)だとされる。

細男と称する木偶は、山城の離宮八幡宮にもこれを蔵すること「嬉遊笑覽卷七」に見え、山城名勝志には「此祭りに細男と云う兩つの人形あり、是れ武内明神・高良明神なり」とある。大分の賀来神社の（祚原八幡宮と）の神幸行列には裸人形の細男（武内宿称という）を神官あるいは稚児がもつて歩くとされるが、平常は祚原八幡宮の本殿に蔵される。ごく素朴な棒状の二尺余りの細長い木像である。「神洞隨筆」には「此賀来社の善神王ノ神体と云うものは、祚原八幡の材木のこけらを持って作る事なり、祚原社は三十三年に一度改造るに、其第一の材木のこけらをを用うる由なり、されば其神体と云物は、いといたかりそめなる物なり、只に頭ばかりを作りて、常には祚原八幡の神殿内の柱にかけ置く事なり」と記されている。古体を伝えるに近いものと言うべきであろう。（このことは、木霊が「久々遲命」とよばれることと関連がありそうにも思われる。）

これらよりしてみれば、細男ノ舞がその伝承の由来としてゐる神功皇后の故事について考えるべき段階にたつたようである。「太宰管内志」所引の「宇佐宮縁起」にはそれについて左のように記されている。「皇后征三異国、干レ時白髮老人来、奉レ導曰、磯鹿島有ニ安曇磯良者、宜キ召レ之借ニ千珠滿珠於海中、若將ニ此珠ニ則ニ三韓自服矣、皇后曰、如何可レ召、老人云此童愛ニ細男舞、又名ニ男良舞、為レ之便自来、皇后曰、唯為レ之、老人曰、使ニ奉人奏ニ音楽、翁自舞レ之、既而舞、磯良忽化ニ舞人姿、着ニ淨衣踏皮脛巾、掛ニ鼓於頭、以レ袖掩顔、乘ニ亀甲、自ニ海中出、皇后則使ニ妹壘姫、与ニ磯良ニ至ニ海神宮、借ニ得ニ珠、於レ是投ニ此珠於海、而三韓降伏、」とあり。志賀の海神（住吉大神）の援を得たのである。

右の記事と古要宮の神事ないし傀儡子によつてみれば、記・紀の物語りによることが明らかである。すなわち、古事記・中巻の仲哀天皇の条に「天皇、筑紫の詞志比の宮に坐しまして、熊襲國を撃ちたまはむとせし時に、天皇御琴を控かして、建内宿称ノ大臣沙庭に居て、神の命を請ひまつりき。於是、太后、神掃して言教へ覺したまひつらくは、西の方に國有り、金銀を本めて、目の火耀く種々の珍宝其の國に多に在を、吾今其の國を帰せ賜はむとのりたまひき。ここに天皇答へ白したまはく、高く地に登りて西の方を見れば、國土は見えず、唯大海のみ有けれ、とまおして、詐為す神と謂て、御琴を押し退けて控ぎたまはず、黙座しぬ。かれ其の神大いに怒らして、凡茲の天下は汝の知らすべき國に非ず、汝は一道に向ひませ、と詔りたまひ

き」天皇、幾久もあらずして崩れたまう。また如し此、言教えたまうた大神は底筒男・中筒男・上筒男三柱の神（住吉大神）であつたことが分つたのである。

宇佐宮縁起が、古事記のこの段の解説であり、古要宮の神事とその演技なることは明らかである。しからば細男舞が人によるか、木偶によるかの論争はあるとしても、細男そのものの本質成立についてみると、「宮中神楽において才の男が滑稽演技をすることは、もと神そのものの現われに起源を發すると思われる。其の神とか精靈とかの位置に立つ人長の神聖なる演技に對し、細男はもどき役をすべきで、人長の役なる神の託宣を人語に解し、人の動作に移して、神意を現わし示すわき役に相當するものと考えてよい。仕業の滑稽となるは後の軋訛であつて、元來は神聖なものである……」と平井武夫氏の説かれることが首肯するに価しよう。山城離宮八幡また柞原八幡における素朴な武内宿称の木像（木偶「くぐちの命」こそ古体を伝えるものであり、古表・古要二社における多くの傀儡子のうちにもそれと似た素朴なものがある。そして細男舞は武内宿称のはたした役割りであつたと解される。

ここに仲哀天皇の御琴をひいて神を招かれ、神功皇后の神憑りして、武内宿称の神との応答してこれを伝えること。この三者の關係のうちに見られるものが、のちに細男ノ舞の神事（神楽をふくめて）となつたものとするものが出来よう。

住吉大社の神事（大袂の祭事）についても、海上に船を浮べて盛大な伎楽を奏すること、北九州からセト内海沿岸をすぎて近畿に及ぶ各地の住吉神社に同様な祭典が見られるのである。ことに大阪から兵庫にかけての住吉社の神事には盛大なものがあつた。わが大分市の住吉社の神事もかつては盛大をきわめたことが伝えられている。国東半島武蔵町の住吉社では神輿を水につける神事がいまも行われている。住吉大神が神功皇后の征韓の故事にちなむことの多いゆえに瀬戸内海の沿岸から北九州にかけて数多く鎮座・分布することは当然であるが、この三柱神が航海の神であることは、筒男のツツが星（ツツ）を指し、したがつて星学・天文学的知識が航海に必要であることを象徴するのだと説くものもある。これはまた八幡神に関連する海宮神話にでる干珠・満珠が、潮汐および海洋学的知識のことであつたとみなされると好対照である。そしてこの住吉大神と八

幡大神（豊姫また玉依姫という）とが神功皇后の征韓の故事を契機として強く結びついているのも当然のことと考えられる。海上の神事がその中心をなす祭り行事であることも肯げよう。

海神を祀り鎮める神事として、船を海上に浮べて音楽を奏し、細男ノ舞を舞う神事と、神功皇后の征韓の故事とに一脈通ずるものがあることから、神憑り（か）と舞・楽とをすこしく考えてみねばなるまい。

神功皇后の神憑り（か）が、筑紫の橿日ノ宮（カシヒ）カジリ（カ）カジリ（カ）伽辞離（カ）で行なわれたことは、神武天皇の東征・大和平定にかかつて神を祀り（カジリ（カ）伽辞離（カ））、橿原に既位したということとほるかに応ずるものがあつた。カシ（カ）カジリ（カ）カジリ（カ）伽辞離（カ）なることは言うまでもなく、これは日本書紀に詳しく見られる。すなわち伽辞離とは呪詛（カジリ）であり、天神地祇をまつて呪詛することであつた。神武天皇の大和平定の諸戦には、このカジリが大きな要素をしめ、天ノ香山（カ）の埴土（カ）をとつて土器を作り、天神地祇をまつて祈り給うたことが見える。そしてその埴土を取るのに佐賀ノ関（速吸ノ門）からセト内海を教導した珍彦（ウズ彦、椎根津彦ともいう。のち倭ノ国造）がこの仕事に当つている。そして今も摂津の住吉大社に「埴取の神事」が伝存していることは象徴的である。八幡神が巫子（カ）神信仰の性格をつよくもつことは定評があり、書紀・景行天皇の九州征討にも豊前の神夏磯（カシ）媛がカジリ媛としてすこぶる高い地位を与えられていることも照応する。（拙著『邪馬台女王』第十章参照）。ここにも伽辞離（神憑り）を中心として神功皇后と住吉大神・八幡大神との強い紐帯を感じる。

ところで神武天皇の東征に水師啓開の役をつとめるとともに、伽辞離の神事にも大任をつとめたウズ彦が、セト内海の西辺速吸ノ門における海人族をあらわしているのに対して、東セト内・鳴門からさらに伊勢・志摩の海人族を示していると思われるものに「天宇受売命」がある。宇受売ノ命が日本における舞楽の祖とされていることは、その天ノ岩戸において神憑りにおどり狂うた故事による。彼女は猿田彦に勝つとともにまた夫婦となり、のち猿田彦が漁して海塩に溺れたとき海底に到つたと伝え、供御御贄の潜女でもあつた。ウズメ（カ）渦姫であり、これは西のウズ彦（カ）渦彦に対応するものであつた。海人族であり、

神憑りに舞踊する大役をはたしている。海人族と舞楽と伽辞離との関連が一入強く私たちにせまつてくる。この舞がのち細男ノ舞として歴史に登場するに至るのである。舞がはたして人により行われたものか、あるいは木偶（くぐちの命）ノ傀儡子により行われたかは一の問題であらうが、ここには問わないこととする。

一方、このような神事（伽辞離）に際して音楽を奏することも重要なことであつた。神の霊を招き、神の教えを請うにあつて、神聖な楽が奏せられたのである。楽の調べは神に通ずるものであつた。さきに引用した神功皇后の征韓の故事について、仲哀天皇が「御琴」をひきたまうて神の出現を祈り、武内宿称が沙庭に居て神の命を請いまつたと記されているのは、それを示している。この場合、神の出現を請うのは「御琴」の調べであつた。

ところで、このような琴はいかなるものであつたらうか。古墳文化の遺産としての埴輪（ハニワ）のなかに、関東地方（前橋市朝倉）の出土品として、腰に太刀をはき、籠手をつけた武人が膝に琴をいだいているものがある。奈良時代の貴族とは異なつて当時にあつては武人であつて楽人であつた。これはまた仲哀天皇・神功皇后の故事をしるに足るものである。

琴については、すでに前漢時代（前二〜一世紀）に琴瑟に類する楽器として坎侯、空侯の名が見え、西方から来た豎琴ハープの空侯とは、イラン語の *qunigao* の音訳だと考えられている。西域から伝来の豎琴を空侯といい、中国在来のものを臥空侯といつたという（正倉院御物のうちにその残欠があることは著名である）。これによつて、琴のよび名を空侯といつたことが分る。それはおそらくわが国にもそのまま伝えられたことであらう。仲哀記に見える「琴」もおそらくそのようなものであつたと思われる。

上述の神事が、海上に船において、楽を奏し舞をまつたとされるが、琴と関連してまた舟のことが仁徳記に見える。此の御代に和泉國に一高樹あり、其の樹の影、朝日に当れば淡路島におよび、夕日に当れば高安山を越えた。是の樹を伐りて船に作れるに、いと夙く行く船であつた。それゆゑ「枯野」と名付けた。この船が壊れたので塩を焼き、その焼け残れる木をとつて琴に作りたるに、其の音七里に聞えた。その歌に、

枯野を 塩に焼き 其があまり 琴につくり かき弾くや 由良の門の 門中の 海石に 振れたつ なづの木の
 さやさや

「枯野」と名付けられた神聖な船は、朽ちてのちもその木の精がこつて「御琴」となつた。船といい、琴という。ここにも因縁が感ぜられるのである。書紀では応神天皇三十一年のこととされている。また一説では神功皇后の御征韓にかかる船五百艘の装備を伝えている。「釋日本紀」所引の「播磨風土記」には明石郡の逸文に、朝日には淡路島をかくし、夕日には大倭島根に影する大楠の樹を伐つて船を造つた。其の迅きこと飛ぶごとくで一撒に七浪を越した。仍ち「速鳥」と名付けた。此船にのつて御食（ミケ）に供せんがために此井の水を汲んだという。一旦御食の時に堪えず。歌にいう、

住吉の大倉さして飛べばこそ速鳥とはいはれ、何の速鳥

この住吉の大倉・御食のことは、おそらく朝廷のことでなく、住吉大社のことであろうとは田中卓氏の言うところである。住吉大神の御食については、またこの付近一帯が住吉社領であつたことにも関連しよう。住吉大社と「船木部」との深い関係についても田中氏の考察がある。また応神・仁徳両朝の御幸があつて、海部をして漁を進貢させたため、淡路島を一名、御食津国と称されているのと好対照である。そして豊前の山国川が御木川とされ、その兩岸が上毛・下毛のミケ郡であつたことが宇佐八幡宮の御食（ミケ）と供御御贄に關することとも対照されよう。宇佐宮の放生会に際して、古表・古要二宮の神事が奏せられていたことは前述した。宇佐宮の放生会が海から「ニナ」をとつてこれを船で海中に放すとは、中野幡能教授の御指教があつた。日出町大神の真名非八幡の由事にも「ニナ」が用いられて古体を伝えていると、佐藤悌氏から御教示をうけた。

御食（ミケ）・供御（クゴ）御贄・漁人（海士・海女）、それが船に關係し、海上航海と因縁する。さらに海神をまつり鎮める神事とむすびつき、神功皇后の征韓の故事を媒介として住吉大神と八幡大神とが關係する。これは一に日本上古における海人族の祭りであつた。ウズ彦・ウズメ命に見られる伽辞離・舞樂であつた（これが神武天皇・神功皇后に投影する）。神意を請うこととして「御琴」の調べが奏せられ、神と人との仲立として武内宿称（のち細男ノ舞人）が出現する。

さて傀儡子（くぐつ）のことについては、西宮夷子社（エビス）の伝えがあり、夷子（エビス）社の祭神、蛭子ノ命（ヒルコ）が足腰が立たなかつたとき、神主の百太夫がお伽のため人形を作つてこれを舞わし、海神を慰め風波をしずめたと言われている。宇佐にも百太夫社があり、いま傀儡子こそ無いが古表宮と同じく、隼人征伐に神軍出征の故事を伝える（神官六人みな楽人とす）。夷子社はもと西宮広田社の末社ともいい、広田社の祭神を神功皇后とすることからすれば、伝承のことはそれとしても、いづれにおいても海神にかかり、海神をしずめることにかかつている。傀儡子||細男ノ舞||伶人（人形にかかるか人にかかるかはいま問わないでおく。しかし木偶||くぐちの命であるらしいことは一考を要しよう。）の關係が古表・古要の二宮における「ヒメ大神」（豊姫という）を俗に「虚空津姫」と称したものであつて、これは傀儡子のことによつて付けられた後世のよび名であるかと思ふ。

これに対し、魏志倭人伝における「狗奴国」の「狗古智卑狗」は西暦三世紀半ばのことであり、一方に「邪馬台国」の女王「卑弥呼」が、よく鬼道に事えて、人を惑わすとされる「伽辞離」的な女王であることが記されている。これによつてみれば「狗古智卑狗」の性格もまた「狗奴国」王をたすけてよく「伽辞離」の大役をはたし得る人物なるべきであつて、神武天皇の故事における「ウズ彦」、あるいは神功皇后の故事における仲哀帝ないしは武内宿称の役割りを果すべき人物であらねばなるまい。ここに「琴」が空侯とよばれたことからすれば「狗古智卑狗」とは「空侯ツ彦」であつたかと思ふ。少なくとも今の私としては、琴||空侯の調べが神を招き神意を請うものとして、「狗奴国」の「狗古智卑狗」の名を「空侯ツ彦」の意として考へておきたい。